

④自閉症者援助技術

課題:「冰山モデル」の概念にもとづいた行動理解とその支援の実践例を述べなさい。(事例)

•はじめに

自閉症の特性は、細部に注目するこだわりや、抽象的な概念の理解が苦手、特定の感覚に対する敏感さ・鈍感さなど多岐に渡り、重複する他の障害等によっても様々違ってくる。彼らの起こす行動が、本人や周囲に悪い影響を及ぼす問題行動として表面化した場合に、その特性を理解し、原因を探る事は TEACCH プログラムでは冰山モデルと呼ばれている。

本レポートでは勤務する通所施設に通うA氏の支援に関して行った冰山モデルの実践例について述べていく。

•通所開始時のA氏の状況

A氏は男性で、重度の知的障害者。養護学校の高等部を卒業すると同時に、今の施設へ通い始める。ADL は歩行・移動・食事は自立しているが、排泄や整容行為は介助が必要。清潔に対する意識は無く、排便の際、弄便行為を行う事もある。発語は無く、周囲に対し要求を伝える事は無いが、自分が不快だと感じる事には大きな声だしと自傷を行う場合がある。単語のような話し言葉や、道具を使用した視覚的な指示を理解する事は可能。物を握る事が好きで、自分の周囲にある様々な小物を手に取り、遊び続ける事を常に行う。

•通所開始後の状況と支援の内容

通所開始直後には活動に中々参加出来ず、一人で離れた場所へ行く、一部仲の良い支援

員を除き、人と接するのが苦手で、近くに居るだけで興奮するなどの問題があったが、特に「近くにある様々な物を掴み、壊れやすいものを力強く握ったり、ティッシュペーパーの箱をバラバラにしたりする」という点が問題となった。手を怪我する可能性や、衛生面の不安もある為、始めは壊れやすい、危険な物については取り上げ、言葉による説明を行ってみたが、すぐに別の物に手を出したり、あまり交流の無い支援員が対応すると激しく興奮しだしたりする等、問題の改善には至らなかった。

その為、彼の行動を最初から確認し直し、特性を把握した上で、対応方法を検討する事となった。

•問題行動の分析

まず問題となっている行動の一連の流れを改めて再確認してみたところ、手に取る物については握れる程度の大きさの筒状の物を好み、触れたり握ったりする事に興味を持ち、必ずしも壊す事を目的とはしていない事、物を触る事自体が強いこだわりであり、持つ物が何もないと周辺を徘徊し、置いてあるティッシュ箱や、その他手頃な大きさの物を触って欲求を満たしていると思われた。

•分析結果から行った対応と結果

まず、強いこだわりである物弄りについては触れても壊れる等の危険が少なく、かつAの好むと思われる道具と、A専用の道具箱を

用意して、日中に活動を行う部屋に専用のスペースを設ける事にした。壊れやすい物、危険な物については鍵付き戸棚を用意してその中に入れるなどして、手の届く位置からは撤去するようにした。物弄りをする際には箱の置かれたスペースに誘導し、そのスペースで、専用の箱から取り出した物で遊ぶように促した。また、用意していた道具以外の物弄りをしていた場合は、Aの道具箱から道具を取り出し、物弄りをしたい場合は道具箱から出した道具だけにするように伝えつつ交換してもらい、交換に応じた時は「ありがとう」等の感謝の声かけを行うようにした。

専用スペースへの移動と、道具箱内の道具の使用を促したところ、最初のうちは物を交換するだけでも興奮し、声を荒げる事もあったが、繰り返し続けた結果、特定のスペースで、道具箱から物を使えば邪魔をされないという事を理解した様子で、支援員の促しに段々と応じるようになり、更に時間が経つと、遊びたい時は自分からそのスペースに向かうようになり、活動中の周辺の部屋への徘徊や、物色も減ることとなった。

また、専用スペースでの物弄りが定着した後、そのスペースに居るAの近くで、あまり交流の無かった支援員が無理には声をかけずに近くでの見守りを行ったところ、Aは最初のうちは少し警戒していたものの、徐々にその状況に慣れていき、見守りを行った支援員と他の場面での交流の際にも声を荒げて興奮する事が少なくなる等の傾向が見られた。

・最後に

冰山モデルの概念に基づいた対応を行う場合、当事者だけに限らず、周囲のスタッフの理解や環境改善といった、時に大掛かりな行動も必要だが、本人に対し、無理なく過ごしやすい環境を用意するという考え方は問題行動を起こす本人に受け入れられやすい事が多く、支援の現場においても実践する機会の多い考え方であると言える。

講評:良い実践レポートです。「無理なく過ごしやすい環境設定の必要性」については私も同感です。